

第5回北東アジア国際観光フォーラム(IFNAT)ウランバートル会議

ERINA 特別研究員 鈴木伸作

2008年10月15日～17日の3日間、モンゴル・ウランバートル市において「第5回北東アジア国際観光フォーラム(International Forum of Northeast Asian Tourism; IFNAT)ウランバートル会議」が開催された。

参加者は開催地モンゴルのほか、日本、中国、ロシア、韓国から82名、現地参加の北朝鮮を加え、6カ国、200名を越えた。

IFNATは歴史が浅く、認知度は必ずしも高くないが、民間レベルで誕生し、北東アジア5カ国が参加する形で継続的に開催されていることは評価される。

1. IFNATの生い立ちと経緯

2002年6月、東洋大学観光学科の梁春香教授の提唱で「日中共同観光会」が発足した。この会は、中国東北部の古代渤海国の歴史をたどる研究会を重ね、「北東アジア観光研究会」と改称し、北東アジア6カ国の官・学・民の観光関係者との連携を深めながら、3年計画で北東アジア広域観光交流圏構想のマスタープラン作成を目指すこととなり、IFNATの組成につながった。

第1回会議は2004年8月に大連市において開催され、中国東北三省関係者を中心に日・中・韓3カ国、約50名が参加した。

第2回は2005年3月に韓国大邱市において、第3回は2006年9月に新潟市においてそれぞれ開催された。第3回会議は、中国、韓国、ロシア、モンゴル4カ国から約150名、日本側参加者が200名、計350名が参加。日本側研究グループから「北東アジア観光開発のための共同戦略策定の提案」がされた。

その構成は、北東アジアの観光の現況と将来、北東

アジア観光の発展に向けた具体的な取り組み、各国の特別観光地の選定となっている。また、IFNATの取り組みとして、これらの提案を議論する場として北東アジア観光会議を設置し、政策立案し、その実効性を高めるために、常設的な会議開催と事務局の設置を提案している。

この「共同戦略策定の提案」は新潟大会のメモランダムとして採択され、具体化を目指してより緊密なネットワークを組んでゆくことを確認した。

第4回会議は2007年11月5日～7日、束草(韓国)～新潟～ザルビノ(ロシア)を結ぶ日本海横断航路(北東アジアフェリー航路)の開設計画と相まって、域内観光交流の期待が高まる中で開催された。

束草会議では、北東アジアフェリー航路における物流と観光振興への期待、観光教育による人材育成の強化、各国の観光法令の実状と問題、北東アジア域内ネットワークの構築など具体的な事項が議論された。

会議の最終日に採択された共同宣言文には、観光・貿易のインフラ構築のために各国政府の積極的支援を喚起してゆくこと、国境を越えた交流の促進、産官学が連携する形でIFNATが継続してゆくことなどをあげた。日本から観光学を学ぶ学生も会議に参加し、地元観光大学の学生との交流を行い、会議の新しい芽も生まれた会議であった。(関山信之「北東アジア広域観光交流圏構想の沿革」参照)

2. 第5回IFNATウランバートル会議の概要

今回特筆すべきことは、主催した実行委員会の構成にモンゴル自然環境・観光省が参加し、会議を指揮した点である。今後政府機関がIFNATの開催に関わる契機となれば、

ウランバートル会議は大きな一歩となる。実行委員会にはほかにウランバートル市、モンゴル商工会議所、モンゴル観光協会、モンゴル観光促進センターが参加した。

会議のテーマには、北東アジアの観光振興、北東アジア観光ネットワークの構築に加え、特にモンゴルの観光発展、エコツーリズムが取り上げられた。また、3回会議から参加している日本の学生と開催地モンゴルの学生によるスピーチコンテストを兼ねた学生セッションが設けられた。

この会議の準備は、モンゴル側は大手旅行社Juulchin World Toursが実質的窓口となり、ERINAが協力して進められた。

モンゴル自然環境・観光大臣主催歓迎パーティ（10月15日）

L. ガンスハ（Ganskh）自然環境・観光大臣が主催者を代表して挨拶した。また、海外からの参加者を代表して、新潟モンゴル名誉領事の中山輝也日本代表団長がモンゴル側組織委員会に対し感謝を述べた。

会場にはモンゴル国政府幹部やウランバートル市幹部、海外参加者、モンゴル観光関連企業者に加え、市橋康吉在モンゴル日本国特命全権大使をはじめ、韓国大使、ロシア大使館や北朝鮮大使館幹部も出席するなど国家レベルの関係者が参集し、国際色豊かな歓迎パーティとなった。

開幕式（10月16日）

開幕式はチングスハーンホテル会議場で行われた（写真1）

議長にL. エンフノサン（Enkhnosan）自然環境・観光省副局長を選出し、自然環境・観光省、ウランバートル市、参加関係国大使館、モンゴル観光関係者、海外参加者など220名を超える参加の中でオープニングセレモニーと基調講演が行われた。（写真1）

開幕挨拶は自然環境・観光大臣、ウランバートル市長代理、海外参加者を代表して関山信之北東アジア観光研究会会長が行った。



（写真1）

基調講演（10月16日）

E. バツルガ（Battulga）モンゴル自然環境・観光省局長

現在モンゴル政府は新しい法律を策定中だが、観光ホテルや観光地など税金の軽減処置を検討している。2007年の観光客は45万人であり、2000年に比べて3倍となった。2015年にはウランバートルの人口と同じ100万人にするための計画を策定しており、そのためにインフラ整備、ホテルの増加、カラコルムやゴビへの道路建設を行う。

モンゴル航空（MIAT）は航空便を増加し、乗客は4年間で82%増加した。モンゴルはロシアのウランウデ、イルクーツク、中国と鉄道で結ばれている。今後北京・ウランバートル間の汽車の便数も増加させる。ウランバートル市に新空港の建設が決定され、今後の観光開発に備えた新しいゲートとなる。2006年から日本・韓国・中国の観光会議を定期的で開催し、各国と政府間協定で観光発展を進めている。

モンゴルの観光はスタート地点であり、大自然と遊牧によるエコツーリズムによる観光開発を考えている。新しく観光省を環境省に合併し、観光を自然に合わせて開発してゆく。

Ch. バット（Bat）ウランバートル市長代理

北東アジアの観光開発はウランバートル市の発展にも大きな影響を与える。モンゴル国は昔から世界の東西の結節点で、シルクロードとモンゴル帝国により7世紀から始まり、17世紀には世界の交流の中心地でもあった。アジアとヨーロッパの観光の架け橋で、地上の橋はウランバートルであった。

1990年にモンゴルは新しい国に生まれ変わった。新しい観光開発を行い、観光イベントを季節ごとに分け、観光市場を広げようとしている。

ホテル、ナイトクラブなど新しいビジネスが数多く生まれ、観光業はウランバートル市の重要産業として支援されている。現在、ウランバートル市特有の遊牧文化と現代文化に合わせ、青空と緑のまちをつくる事に全力を挙げている。

鈴木勝・桜美林大学ビジネスマネージメント群教授：「北東アジアの観光の振興手法」

世界観光機関（UNWTO）によると、2007年の世界観光客到着数は約9億人で、「グローバル大交流」時代の到来といえる。特にアジア太平洋の観光客の伸びは顕著で、北東アジア地域は1億400万人、EUやアセアンに匹敵する観光交流圏の可能性はある。日本は「観光立国基本法」を策

定し、今年10月「観光庁」がスタートした。2008年の訪日外国人観光客は900万人が予想される。

北東アジアの国際観光は、地域に偏りがあり日中韓3カ国間の往来が中心、冬場が極端に少ない、観光のプロフェッショナルが少ない、観光情報や観光統計、安全・危機管理情報が少ない、国境をまたぐ観光商品が少ない - という問題がある。

北東アジア観光の具体的な活性化策として、外国旅行の制限緩和・自由化（ビザ免除、空港手続きの簡素化）、

観光インフラの整備（空港やホテルの整備、ソフトでは通訳ガイドや観光プロの養成）、観光地やツアー商品開発、トライアングル・マルチデスティネーション型ツアー（国境超えツアー）の開発、観光プロモーションの開発と活発化（北東アジア周遊航空券、フェリー・航空・バス・列車のアライアンス）を提案する。

これらを実現するために、早期に北東アジア域内に北東アジア観光ネットワークを形成し、観光格差をなくし、人材育成を行うことが求められよう。

張広瑞（Zhang Guangrui）中国社会科学院旅游研究センター主任：「過去60年における中国観光発展」

1945年に中国が独立し、社会主義国時代は、世界に中国を紹介するために観光を政治的に利用していた。1980年以降、市場経済の中で、観光業で利益を上げることができるようになった。観光収益は1980年の2.6億ドルから、1993年に50億ドル、2000年は160億ドルに達した。

1990年に週休2日制が導入され、国内旅行が発展した。国民が裕福になって国内旅行が盛んになり、富裕層が増えたことにより海外旅行も増加している。

2000年からは、国内生活レベルの同一化と民族間の友好にも役立つものとして、観光は社会的に重要なものになっている。都会人の田舎訪問ツアーにより田舎には収入が入り、都会人は田舎を知ることができる。エコツアーにより国民は自然を守ることの大切さを理解した。レッドツアーは中国の文化資源や社会主義の誕生を見せる企画であり、地方在住者と都会在住者をつなぐプロジェクトになっている。

政治的にヨーロッパ諸国、隣国、アメリカなどからの中国旅行を受け入れ、インバウンドだけでなくアウトバウンドも開発するために広域諸国と協力関係を構築し、台湾とも観光開発の契約・協力をしている。

アメリカのサブプライムローン問題や燃料高騰などは観光客に大きな影響を及ぼしている。テロから観光客を守ることが大事であり、観光客が自分の身を守るプロジェクト

を考えることや、予知できない自然災害、エイズや伝染病などの問題への対処、環境問題もある。観光業はそれぞれの問題に一步一步解決するしかない。

セルゲイ・チホミロフ（Sergei Tikhomirov）シベリア協定国際連合実行委員会副会長

16世紀から19世紀、中国 - モンゴル - シベリア - モスクワを結ぶ「茶のルーツ」が存在した。茶のルーツ研究を観光連携のモデルケースとして、IFNAT関係者の共同プロジェクトを提案したい。

Kwon Joong-Rok 大邱大学教授：「観光発展のためのブランドづくり」

ニュージーランドは、風景がブランドになりうるかを調査研究し、風景とアドベンチャーが観光資源になるとの結果を基に、アメリカ、日本などに積極的にPRを行った。個性を見せることを大切に、今後は北東アジアのブランドづくりが重要である。

分科会（10月16日）

基調講演終了後、3つの分科会とポスターセッションがウランバートルホテルのコンベンションホールで開催された。

・第1分科会「北東アジア観光振興・各国からの視点と分析」

発表者8名（日本2名、モンゴル2名、中国1名、ロシア1名、韓国2名）

・第2分科会「北東アジア観光振興・地域からの視点と分析」

発表者9名（日本1名、モンゴル4名、ロシア1名、韓国3名）

・第3分科会：学生スピーチコンテスト「学生交流における国際観光振興」

大学）

・ポスタープレゼンテーション

発表者11名（韓国9名、モンゴル2名）

今回初めての試みとして、社団法人日本ツーリズム産業団体連合会の協賛を受け、「観光学を学ぶ学生論文発表会（学生スピーチコンテスト）」が開催された。英語でプレゼンテーションを行い、聴衆からの質問も受ける参加型のコンテストで、参加者からも大きな拍手を受けた。

このコンテストについては、コーディネーターの井出明・首都大学東京大学院准教授からいただいたコメントを紹介したい。

第5回IFNATにおいて、新しい試みとして、TJI（日本

ツーリズム産業団体連合会)の後援により、学生セッションを設けることとした。

エントリーはモンゴルから3タイトル、日本から3タイトルの合計6組の申し込みがあった。セッションは、パワーポイントを用いた英語による口頭プレゼンテーション形式で行われた。審査員は私のほかモンゴルから1名、公平を期すために中国から1名を加えた3名で行われた。

審査の項目は、プレゼンテーション力、英語力、内容の3点で構成され、各項目が段階的に採点される形式とした。

優勝は、モンゴル国立大学のBOLORTUYAさんが発表した「Community Based Tourism: An Example of Ger Tourism」が勝ち取った。

本報告は、モンゴルのゲル集落におけるコミュニティーそのものを観光資源として捉え、そこに観光客を呼び込むための方策を論じた力作であった。現地写真を多用したスライドは大変啓発的であり、モンゴルの魅力を感じさせた。

2位には大阪観光大学の伊崎亜紗さんと逸見優さんによる「Activities of "Come on! Northeast Asia"」が選ばれた。こちらのアイデアは、各大学の留学生提携先を利用した、大学間ネットワークによる北東アジアの交流と観光活性化を試みるという大変ユニークかつ斬新なもので、そのコンセプトが高く評価された。彼女達の受賞は、在籍校である大阪観光大学でも喜ばしいニュースとして受け止められ、大学の公式ホームページでもその快挙が讃えられている。

最終日に開催された閉幕パーティにおいて表彰式が開催された(写真2)。モンゴルおよび日本の受賞者たちがお互いに固い握手を交わし、検討を讃えあった姿が大変印象的だった。何かと準備は大変であったが、その情景は我々主催者側の苦労に十分報いるものだった。

観光学は未だ新しい学問領域であり、その発展のためには若い力を育成する必要があると痛切に感じている。来年



(写真2)

以降、IFNATにおいてこの試みが定着し、若者達からの応募で溢れることを願ってやまない。

3. モンゴル観光博覧会「EARTERN CIRCLE EXHIBITION」

IFNAT会期中、観光博覧会がミシェル・エクスポセンターを会場に開催された。博覧会はモンゴル国内の観光産業の商談会や観光PRが目的で、主催者はモンゴル自然環境・観光省、ウランバートル市、モンゴル観光協会など。毎年開催している博覧会を今回はこの会議に合わせて開催した。

出品者は旅行社、観光土産品製造業、ホテル、ゲル経営者、各地観光協会、カシミヤや毛皮などの特産品製造業、イベント企画会社、民族衣装製造など100社・団体であった。

海外からはロシア・ブリヤート共和国や韓国・大邱観光協会が展示コーナーを設置し、日本からは新潟県・新潟市の観光パンフレットが配布された。

主催者側は今後、北東アジアからより多くの出品者を募集し、この観光博を国際色豊かなものに拡大したいと考えている。

4. ウランバートル市内観光視察とミニナーダム見学

組織委員会は海外からの参加者のため、市内観光視察とミニナーダム見学プログラムを組んだ。

モンゴル自然科学博物館では、モンゴルの地理、鉱物資源、動植物、特に恐竜の展示が圧巻だった。

モンゴル最大の祭典ともいべきナーダムのコンパクト版、ミニナーダムはウランバートルから車で40分の草原地帯で披露された。遠くの草原にはところどころ冠雪が見られ、薄いモヤがたち、夏の緑の草原とは異なる神秘に満ちた景色に参加者は感動していた。

子供による競馬は零下の寒さと風の中で、人馬とも白く吐く息が印象的で、優勝・準優勝した子供と親の喜びようが素朴で自然であった。

モンゴル相撲は12人ほどの力士が出場し、儀式や迫力ある力相撲に参加者から大きな拍手がわいた。

この時期にこれだけの演出とプログラムを組織してくれたモンゴル側のホスピタリティには、参加者から感謝の言葉が多く聞かれた。

5. 共同宣言

会議の最終日(10月17日)参加国の代表が出席して共同宣言文が協議され、閉幕式に5カ国代表が署名し、発表された。

北東アジア域内間の観光を発展するために、観光関係者による交流と協力が重要であることを共に認識した。

北東アジアを平和で発展した地域にするためには、国境を越えた交流と連携が重要である。

観光関係者間で、具体的な観光開発プロジェクトや共同事業を推進する。具体的には「茶のルーツ」や「観光における危機管理」についての共同研究プロジェクトを

立ち上げる。

なお、懸案だったフォーラム継続開催のための常設事務局・組織の設立については、次回開催地が議長となり、引き続き協議することが盛り込まれた。

次回の第6回フォーラムは2009年5月、ロシア・ハバロフスク市において開催される。